

金賞

「その人」が教えてくれたもの そして「私の誓い」

愛三工業株式会社 安城工場 ダイカスト事業部 製造2課

藤原 恵介

ある日、工場の一角から、言い争うような怒鳴り声が聞こえてきた。約8年前のことだ。なにを言い争っているのか、少し興味がわいたのでその場に行ってみた。

そのころの私は、一般の作業者として生産業務に当たっていたが、作業をすること自体にまだ深い思いはなかった。私の業務は、アルミダイカスト工程のオペレーターで、「ダイカストとは？」と聞かれても、胸を張って答えることができなかったことを覚えている。ただ、この一件で、「モノづくり」とはどういうことか、安全な職場環境とはなにか、いい製品ができる前提とはなにか、なに気なく携わっている機械にも“感情”がある、ということを知った。機械は、苦しいときには悲鳴をあげ、訴えかけ、順調なときには、心地よいリズム感のある音を奏でるのだ。

怒鳴り声の主たちは、ダイカスト生産現場のリーダーと金型保全マン、そして、初老の設備保全マン。その原因は「金型からバリが吹いて（鑄造中のフラッシング）、生産にならない」というものであった。1週間くらい前から急に発生したのだと言う。生産する立場の方は「金型の合わせが甘くなって隙間ができている」と主張していた。一方、金型を保全する立場からは「ダイカストマシンに問題がある」と声があがる。そう言われた設備保全側は「お前たちの使い方が悪いんだ！」と言っているんだなと、経験の少ない私はそう思い込んでいた。

しかし、その初老の設備保全マンは、冷静に両者の言い分に耳を傾けていた。彼はわが社に入社して30年以上のベテランであり、工場のあらゆる設備の修理、予防保全、改良に携わってきた人だった。言い争いが最高潮に達したとき、それまで黙っていた設備保全マンは、こう切り出した。「テメェらは、結局、どうしたいんだ？ さっきから聞いていると、互いの悪口ばかり言い合って…。言ったきりで、何も答えが出ず、このまま解決しようとせず、悪いまま作業やって悪いものつくって、お客さんに迷惑をかけまくって、あげくの果てはケガでもさせて作業者に痛い思いをさせるのかっ!？」と、顔を真っ赤にして、鬼のような形相で二人を怒鳴りまくった。一瞬、私は恐怖感を覚えた。形相にではなく、1つひとつの言葉に。いずれ、自分も職場を預かる立場になっていくであろうという気持ちが少し芽生え始めてきていたからだ。このときが、「責任」という言葉を初めて真剣に考えさせられた瞬間だった。

ひととおりの議論が続いて、それぞれの作業と金型・設備を見直すことで話がまとまり、その場からその人が立ち去るときに私を見付けて、「藤原、ちょっとこい」と、私をあるラインに連れて行った。「おまえ、このダイカストマシンの担当だろう？ このマシンが泣いているのかわかるか？」私にはなにを言っているのか、さっぱりわからない。比較的新しいマシンであるし、これと違って故障の履歴もない。「いつもと変わりはないと思いますけど？ 点検表も○ですし、なにか？」「そうか、わからねえーかあ。こいつよ、トグルんところが、痛えー、給湯機のプー

リーがこすれて痛え！ と泣いてんだよ。見てみろ、動くたびにケツ振ってんだろう！ 気持ち悪いじゃねえか…さっきのバリの話なあ、これだよ」。なんのことが理解できていない私は、「なんだ、このオッサン!? なにを言ってるんだ？ オレは毎日、点検やってるし…。そんなことと言われる覚えはないし。ケツ振っている、なんてオレが担当する前からじゃねえか。アンタになにがわかるって言うんだ！」と、反感と憤りを覚えた。しかし、話を聞いているうちに、だんだんわかった振りをしていた自分が恥ずかしくなってきた。

その人は続けてこう言った。「ケツを振るっていうことは、どっかゆるんでいるということだろう？ ゆるんでいるということ、金型の締め力が失われている。当然、金型にすき間ができ溶けたアルミが入り込みバリになる。さらに、そのバリを挟み込んで金型がつぶれ、また、ひどくなる。単純だろ？ 悪循環が繰り返されて、あの現象になる。つまり、流行の言葉で言うとバリスパイラルだな。だからといって、金型保全に責任がないとは言い切れないんだよ。彼らは、整備をする心構えとして“型バランスを診る”責任がある。バランスから見えてくることはいくらでもあるはず。マシンの調子だってわかるかもよ」。

そして、私はまた別のマシンのところへ連れて行かれた。それは、昭和40年製のダイカストマシンだった。たまに稼動するくらいだが、いまだに現役だ。

「藤原！ おめえよ、このマシン使ったことあるかい？」

入社してから、このマシンには関わったことはない。段取りときには、型締め調整は“ロードメーター”を使いながら人の手で行う、カンとコツがいる特別なマシンである。鑄造中に金型の熱膨張で型締めができなくなるので、ナットをゆるめる作業を伴う、やっかいなマシンだ。できることなら関わりたくないと思っただけで逃げた。

しかし、その人は言う。「これがな、うちのダイカストマシンの基本形なんだ。これを知れば、少々問題はすぐ解決できる。オメエの感性やモノの見方がレベルアップすると思うよ？ 大事なのは、基本だよ。“なんでこうなるんだ”という疑問には、必ず理由がある。とにかく、こいつの面倒見りゃ、そのうちわかるわ。経験が一番だ、ハッハハハ…」と、笑った。「あいつら、なんでも人のせいにしやがるから、ケンカになっちゃうんだ。できる・できない、やる・やらないは、“望む”か“望まない”かだからな。結果的に、損得勘定ができてねえんだよな。へたな壁こさえやがってよ。役割分担だなんて、きれいごとぬかすからおかしくなるんだよな」。

なにかしら、ものさびしげに話す“その人”の姿を見ていると、私たちの狭い視野と小さな感情、将来への希望のなさを嘆いているのが伝わってきた。

「さっき、オメエ言ったよな、“点検表は〇”だって。おめえ、点検表に〇つけたただけだろ？」思いがけない指摘に、ハッとした。その人の言っているとおりだ。点検表の内容をとっさに思い出せない、わかっているような気がしないのだ。1つひとつの文章について「説明してみよ」と言われても、理由付けなんて言えないような気がした。いや、正直言えなかった。話を聞いているうちに自分が情けなくなった。「藤原、いくら機械でも息してんだよ。生きてるんだよ。こいつら口をきかねえだけでよ。調子悪けりゃ、ブルブル震えるし、キーキー音出して泣きやがる。こいつを早く見付けてやりゃあ、いつまでもいいもん、出してくれるわなあ」

たった1時間あまりの会話だったが、自分の仕事に対する考え方が変わった。点検が重い理由、その前提である“整理・整とん・清掃・清潔…”の意味と重み、それらを正しく理解しなければならぬと反省もした。冒頭の“バリ”の一件についても、自分なりに考えてみた。われわれはすぐに「急に」とか「突然、悪くなった」「動かなくなった！」とか言っているが、実は「突然、気付いただけ」「突然、出くわしただけ」であり、もうすでに兆候はかなり前から始まっており、起こるべくして起こったのだ。

今年から、私はアルミダイカスト現場を預かる“組長”となった。8年前の“その人”の言葉を思い出し、1つひとつを噛みしめながら、今こうして文章を書いている。私のこれからの“責任”と“義務”は、後に続く者たちへの“正しい指導”であり、先輩方から受け継いできた“技能”“知識”の、よりわかりやすい伝承であると思う。たとえば、映像を使った作業マニュアルなど、工夫と改善をしていこう、私一人ではなくみんなの力でつくりあげていこうと考えている。それから、個々の改善は大切なことだが、もっと大切なことは「私自身の“考え方の改善”をする」と誓うことだろう。

最後に「その人」は言った。

「オメェんこの上役、毎朝、神棚に向かって“神頼み”してんだろ！ 実はな、あいつ“神さん”に誓いを立ててんだよ。『今日も一日、安全作業します』ってな」